

『動物社会』と進化論——アルフレッド・エスピナスをめぐって

白鳥 義彦

一 エスピナスの位置づけ

ダーウィンの進化論は、もともとは生物学に関わるものとして生まれてきた思考概念であるが、周知の通り、狭い意味での生物学の枠にとどまらず、社会的な影響力を有することとなった。社会科学の側面におけるその影響力の現われ方の一つとして、生物学から得られた知見を人間社会にあてはめて議論を展開する、というあり方を挙げることでしよう。

このような議論のあり方の一つの具体的な例として、本稿ではアルフレッド・エスピナスによる『動物社会』

Des sociétés animales に注目しながら論を進めていきたいと思う。エスピナスは、フランスにおける、デュルケームによる社会学の制度化以前の「先駆者」としてとらえることができるとともに、彼の著した『動物社会』は、生物学的な観点にもとづく社会論から、社会を固有の存在としてとらえる社会論への結節点に位置していると考えられるのである。

周知のように、フランスにおいて、「社会学」という名を最初に用いたのは、デュルケームよりも六〇歳年長で、デュルケームの生まれる前年にこの世を去ったコントであった。エスピナスは、コントよりもかなり若く、むしろデュルケームと同じ世代に属するとみなすことも可能であり（デュルケームよりも一四歳年長）、そしてデュルケームに先立って早くから社会学に関心を寄せていた。

社会学の制度化の流れのなかで言えば、デュルケームがボルドー大学に着任した際の最初の開講講義である「社会学講義」のなかでの、エスピナスに対する言及がまず想起される。デュルケームは、まずコントやスペンサーを、自らに先行して社会的な観点をもって研究を行なったが、総合的な体系を構築することを目指していたがゆえに十分な成果をあげることができなかった、として批判的に取り上げたのちに、エスピナスについて次のような肯定的な評価を示すのである。「この〔コントやスペンサーらによる〕総合の試みの失敗は社会学者たちに対して、詳細かつ精密な諸研究へと進むべき必要性を明示していた。アルフレッド・エスピナス氏が理解したもののこそこれであり、彼がその著『動物社会』において用いたのはその方法である。彼は、壮大な哲学体系の対称性を保証するためではなく、科学をつくりあげるために社会的諸事実を研究した最初の人である。彼は社会一般についての概観だけで満足することなく、個別的な社会類型の研究に努め、次いでその類型自体の内部で諸々の類や種を区別して、それらを念入りに記述した。彼は幾つかの法則を帰納し、それが有する一般性を、彼が研究した諸現象の特殊領域に限定するよう意を用いたが、それは諸事実についてのかかる注意深い観察によってであ

った。「(こうして)彼の著作は社会学[、]の第一章を構成するものである」[Durkheim 1888: 96-97; 邦訳、七七頁]。のちに見るように、エスピナスはボルドー大学におけるデュルケームのこのポストの前任者にあたり、ここに示されている評価も、こうした着任の演説や開講講義に際して慣例としてしばなされる前任者への讃辞という要素を考慮する必要がある。しかし、デュルケームによるエスピナスへのこうした言及は、今日、エスピナスが正面から取り上げて論じられる機会がそれほど多くないだけに、一層興味深い。また、それほど頻繁ではないが、『社会分業論』[Durkheim 1893]などでも、エスピナスへの言及は見出される。

一方、「フランスにおける社会学的研究の現状」について論じた論文のなかでも、人類学および民族誌学グループ、犯罪学グループとともに挙げられている大学人グループの冒頭において、「エスピナス教授は、社会学に引きつけられた最初の人物である。〔……〕『動物社会』は今日非常によく知られている。ただし、この著作の社会的性格はいまだ非常に限定的である。というのも、この著作は本来の意味での社会学よりも比較心理学に一層関わっているからである。にもかかわらず、序論——ここでは社会学の一般史が論じられている——ならびに結論——ここでは社会の本質についての重要な見解が提示されている——は、コント以降フランスにおいて中断された伝統との結びつきが再びなされ、またスペンサーの業績や進化仮説の発展からの影響を受けながら、社会学の一般問題が新たに論じられている」[Durkheim 1895: 90]という言及が見出される。ここでの評価は、先に見た「社会科学講義」におけるものと較べて讃辞ばかりとは言えないものを含んでいる。エスピナスが「社会学に引きつけられた最初の人物」であると述べる点などは、先の「社会科学講義」における肯定的な評価と通じるものがあり、また『動物社会』が広く知られている、という言及はなされているが、「この著作は本来の意味での社会学よりも比較心理学に一層関わって」おり、その「社会的性格はいまだ非常に限定的」である、と述べられているところなどに、この全面的な讃辞ばかりではない評価が認められるのである。またデュルケームはしばし

ばスペンサーを批判的に論じており、さらにエスピナスがテオデュール・リボと共同でスペンサーの『心理学原理』のフランス語への翻訳を行なっていることからしても、デュルケームによるエスピナスの評価は実際にはアンビヴァレントなものを含むこととなる。セレストアン・ブーグレ宛の一九七七年の手紙のなかでも、「エスピナスの著書はとても当惑的である。それは社会学であり、また社会学ではない。それはいくらか気まぐれな哲学史でもある」[Durkheim 1897: 414]と記されている。またここでは、「進化仮説の発展からの影響を受けながら」ということが明示的に述べられていることにも注目しておきたい。

エスピナスにおける進化論的な議論の展開については、デュルケームは次のようにも述べている。「社会学的な省察が呼び起こされたのは、一八七〇年の戦争の後になってのことに過ぎない。その間、コントの試みはイギリスにおいてハーバート・スペンサーによってあらためて行なわれた。コントが想定したように、社会が自然的実在であることをはっきりと立証するために、スペンサーは、それにしたがって社会制度が進化する法則は、宇宙の進化を支配するより一般的な法則の特殊な形態にしか過ぎない、ということを示そうと試みた。彼はとりわけ、社会組織が生物組織との間に示す類似性を強調し、これによって社会を有機体の属の一つの種としたのである。エスピナスが『動物社会』の研究を通じて確認し例証しようとしたのは、この概念である。非常に示唆に富むこの著作のなかで、著者は、社会と宇宙の残りのものとの間に非常に長きにわたって認められてきた空隙を埋めるために、動物はすでに生命体の要素による社会であること、そして、この単純社会から、もはや物質的ではなく精神的な紐帯によって結びつき合いながら高等動物が形成するさらに複雑な社会へと徐々に移行することを示したのである。かくして社会界は、それが断絶なく結びつけられていた生物界の、ある種の開花として立ち現われたのである」[Durkheim 1915: 112-113]。ここでも、とりわけスペンサーとの関連のなかでエスピナスがとらえられており、また単純な社会から複雑な社会へとという進化的な発想のなかで議論が行なわれていることを

確認しておきたい。

当時の社会学の流れとしては、大学内に制度化されていったデュルケームを中心とするもの他に、たとえば、『国際社会学評論』*Revue internationale de sociologie*を刊行し、『国際社会学会』(Institut international de sociologie)を創設した、ルネ・ウォルムスを中心とするものも存在していた。デュルケームの学派とは対立的な立場にあった、このウォルムスを中心とする流れのなかにも、エスピナスは名を連ねることとなる[田原一九八三、二九一—三〇頁; Mucchielli 1998: 149]。こうした点からしても、エスピナスとデュルケームとの関係はある意味でアンビヴァレントなものとなりうるのがまず考えられる。さらに、ウォルムスを中心とするこの流れについては、「その学風と、かつてボルドーではデュルケームの「保護者」であったエスピナスとデュルケームの後継者リシヤールをも自己の陣営にひきぬく組織力とは、さらにタルドをも自陣に擁して、純粹科学としての社会学の確立に余念のないデュルケームとその学派の最大の論敵となった」[田原一九八三、三〇頁]とも言われるが、一九世紀末という当時のフランスの状況のなかで、デュルケームを中心とするもの以外の社会学の流れを、エスピナスに注目することを通じて考察する可能性が開かれていくのである。

二 エスピナスの経歴

次に、エスピナスの経歴や主要著作を簡単に見ておくこととしよう。⁽²⁾

エスピナスは一八四四年五月二三日にヨンヌ県サン・フロランタンに生まれた。父親は薬局を営んでいた。父が一九世紀フランスにおける薬剤師の典型であったとすれば、彼の父は恐らくアルフレッドが後年に告白するこ

とになる自由主義的で反教権主義的な態度の原因となったにちがいない、とローグは述べている [Logue 1983; 邦訳、一六三頁]。サンスのリセでは常にクラスの首席にあり、ほぼ毎年優秀賞を受け、フランス語は常にトップの成績だった。ここでの同級生にはステファン・マラルメがおり、彼らは詩の交換も行なっていた。その後パリに出て、ルイ・ル・グラン校での三年間の勉学を経て、一八六四年に二〇歳で高等師範学校に入学した。この時期の高等師範学校には、テオデュール・リボ（一八六五年卒業）、ガブリエル・モノー、エルネスト・ラヴィス、フェリックス・アルカン（以上一八六二年入学）、エスピナスと同じ学年にアルフレッド・クロワゼ、ダストル、エドモン・ペリエ、さらに下の学年にはエミール・ブトルー（一八六五年入学）、ルイ・リアール（一八六六年入学）などがいた [Lalande 1927: 330-331; 田原一九八三、一〇六頁]。この時期からすでに、エスピナスは彼の生涯をずっと支配する断固とした独立性を示しており、彼の「進んだ」思想はラヴェッソンに大いにショックを与えたと思われる、アグレガシオンの合格は一八七一年まで待たねばならなかった [Lalande 1927: 331]。この年、哲学アグレガシオンに一番で合格し、一八七七年には『動物社会』で博士号を取得している。

当時一般的であった経歴にしたがって、エスピナスはまずコルシカ島のバステリア（一八六七年）、次いでシヨーモン（一八六八年）、ル・アーヴル（一八七一年）、ディジョン（一八七三年）という、いくつかのリセにおいて教職についたのち、一八七八年にドウエの文科ファキュルテの哲学の助教授職を得て大学人としてのキャリアを開始し、同年にボルドーの文科ファキュルテの哲学講師となった。一八八二年からは教育学の講義も担当している。これは、ボルドー市の援助の下に設立された講義であり、のちにこれが「教育学および社会科学」の講座としてデュルケームに引き継がれることになるのである [Lalande 1927: 351]。一八八七年にはボルドーの文科ファキュルテの学部長補佐となり、さらに一八八七年から一八九〇年の期間には学部長を務めている。デュルケームがボルドーに着任したのは一八八七年のことであり、彼がボルドーでポストを得るに際しては高等教育局長ル

イ・リアールの意向とともに、当時ボルドーにおいてこのように要職にあったエスピナスの影響も重要であった。⁽³⁾したがって学問に内在的な関連性ばかりでなく、人事に関わるような制度的側面においても、デュルケームによる社会学の制度化への道程のなかでエスピナスの果たした役割は大きかったと考えることができる。その後一八九四年にパリ文科ファキュルテの社会経済史の講師としてソルボンヌに移る。ボルドー大学の文科ファキュルテの学部長から、ソルボンヌの講師となったわけである。正教授となるには一〇年を待たねばならず、そのことをエスピナスも後に定年退職に際して回想しているが[*Lalande 1927: 357*]、以後、一八九九年に助教授、一九〇四年に六〇歳で教授となったのち、一九一二年に定年退職している。退職後は生地のサン・プロランタンに戻り、地域の学校での教育などにも関わり、一九二二年二月二四日にこの世を去った。

主要な著作としては、『動物社会』（一八七七年）の他に、『イタリアにおける経験哲学』*La philosophie expérimentale en Italie*（一八八〇年）、『プラトンの共和政』*La République de Platon*（一八八一年）、『教育の一般概念』*L'idée générale de la pédagogie*（一八八四年）、『経済学説史』*Histoire des doctrines économiques*（一八九一年）、『技術史社会学的研究』*Histoire de la technologie, étude sociologique*（一八九七年）、『一八世紀の社会学と大革命』*La philosophie sociale du 18^e siècle et la Révolution*（一八九八年）、『デカルトと道徳』*Descartes et la morale*（一九二五年）などがある。ここで注目されるべきことは、デュルケームと同じようにエスピナスも哲学という枠組のなかで教育を受け、そしてリセやボルドー大学において示されているように哲学の教職のポストについていたこと、またこれもデュルケームと同じように、教育学の講義を担当したり、教育学に関する著書を発表するなど、教育学との関係が浅からぬことである。

三 『動物社会』について

エスピナスの博士論文であり、社会的な観点を有するものとしてデュルケームも評価した『動物社会』は、一八七七年にこれが発表されたときにある種の混乱を引き起こした。当初冒頭に「歴史的序説」がおかれていたのであるが、そのなかで当時大学内において誰もあえて語ろうとしなかったコントの哲学に関して述べた部分について、あまりに大胆すぎると指摘され、教会勢力の介入を恐れてその部分を削除することが求められたのである。エスピナスはこの部分のみを削除することは拒否し、そのかわりに序説全体を削除することを自ら提案し、序説なしの初版を最低限五〇〇部印刷することを条件に、これが同意を得たのである(Espinas 1877: 1)。ポール・ジャネはエスピナスに対して、「貴君の博士論文は哲学の博士論文ではなく、動物学の博士論文である。これは理科ファキュルテのために作成されたものである。各ページに、私の知らない言葉があり、私が審査員とはならない事実があり、私が綴字法さえ知らない動物の名前がある」と伝え、また「われわれはカロ氏とともに、現代の固有名はファキュルテの公の議論の対象とはなれないこと、「古典的」な分野にとどまらなければならず、それはおよそ一八世紀で止まらなければならないことに合意した。結局は、貴君の博士論文はアリストテレスの理論をルソーの理論に対して擁護することにある。貴君は、貴君によればこれら両者を和解させるヘーゲルを含めて、このすべてを保持できる。したがって、残り全部を削除しなければならないのはそれ以降である。要するに、この時代以降は、問題はあまりに複雑となり、現代の問題に過度に関わるのである」という手紙を書き送った(Lalande 1927: 335-336)。このような状況を見れば、たとえば一八九三年にデュルケームが『社会分業論』

を博士論文として発表し、そのなかでコントについても少なからぬ言及を行なっていることと比較すると、この一六年ほどの間に状況は大きく変わっていたことがわかる。またこのような経緯のもとで刊行された『動物社会』初版には、当初「比較心理学試論」という副題が付されていた。これも内容的に見れば「心理学」というよりも「社会学」という方がより正確であったと考えられるのであるが、当時「社会学」という語を用いることは研究者としての成功を大いに危うくすると考えられていたためにこのような副題が付されることとなった(Espinas 1877: 11)。このこともまた、のちにデュルケームが自らの学問的営為を社会学の名において行なっていくことと比較すると、大きな相違として認められる。なおこうして「歴史的序説」なしで一八七七年に初版が刊行されたのち、翌一八七八年には「歴史的序説」を有する第二版が刊行されている。この序説は、本文全体のうちの四分の一以上を占めるものであり、この比重からしてもその重要性がうかがわれる。

この「歴史的序説」の内容を見れば、まずその全体は社会というものについてこれまでなされてきた哲学的な考察を、プラトンからはじまってアリストテレス、ロック、スピノザ、ライブニッツ、モンテスキュー、コンドルセ、ルソー、カント、フィヒテ、ヘーゲル、ジョゼフ・ド・メイストル、ヴィーコ、ケトレ、そしてコント、スペンサーといった人々を中心として取り上げながら歴史的に振り返ったものとなっている。したがって、たとえのちの本論部分で動物の社会を題材としながら考察が進められていくとしても、その根底にある問題関心は従来の哲学的な伝統を踏まえたものであることがわかる。

また「社会的事実」という語を用いながら、社会を独自の存在としてとらえようとする視点、社会科学あるいは社会学という名をもって新しい学問の成立をとらえようとする視点、当時の生物学からの成果も取り入れながら有機体的な観点をもって社会をとらえようとする視点などは、デュルケームの関心とも大いに通じるところがある。

次に、『動物社会』の構成を見れば、以下のようになっている。

『動物社会』の目次

歴史的序論

第一部 異なった種の動物間の偶然的な社会——寄生物、片利共生生物、相利共生生物

第二部 同一種の動物間の正常な社会——滴虫類（纖毛虫亜門の原生生物、旧分類で現在は使われていない）、植

虫（サンゴ・イソギンチャクなど形が植物に似た非運動性の無脊椎動物の総称、旧分類体系によるもの）、被

囊亜門（ホヤなどを含む原索動物門の一亜門）、虫

第三部 再生産の機能

第一章 家族——夫婦社会

再生産の機能（続）

第二章 母系家族社会——昆虫における家族

再生産の機能（続）

第三章 父系家族社会——魚類、爬虫類、鳥類、哺乳類における家族

第四部 関係性の生命——小部族

結論

このように見ると、動物の進化論的な展開のなかで議論の筋道がとられていることを読み取ることができる。

四 社会学への道

次に、社会学との関わりという観点から、『動物社会』においてエスピナスが論じていることを検討していくこととしよう。

エスピナスはまず、近代において、社会を有機体としてとらえるに至る三つの流れが存在すると主張する。それは、まず第一に言語学、歴史学および古生物学、第二に統計学および政治経済学、そして第三に生物学および動物学である。これら三つの流れが、一九世紀の初頭以来、同一の目標に向かって自発的に収斂してきたというのである。こうした流れのそれぞれが、それぞれの立場から、またそれぞれの観点にしたがって、社会を、他の生命体と同一の法則にしたがい、同一のエネルギーを発展させる、自然な有機体としてとらえるアリストテレス的な理論に貢献してきた、というわけである [Espinas 1877: 74]。

たとえば歴史学は、人間の自由から発するものをも含めて、時間のなかにおける社会的事実の決定論を主張してきた。与えられた事実の決定論は、法則を求めなければならない。これが、一九世紀の歴史家たちが、程度の差はあれ成功をもつて行なってきたことである。歴史の法則のなかで、異議を唱えられることがもつとも少ないのは、進歩の法則である。それぞれの出来事にはその原因が存し、そしてこれらの原因は一般的なものであるという観念をもつとも受容したフランスの歴史家であるミシュレは、同時に、外的な影響によってすべてを説明する歴史的運命論を拒絶する。ミシュレにとって、ギリシア、フランスは、有機体であり、生命を有した存在であり、集合的人格であった。この偉大な歴史家は、動物の家族について、彼以前の誰もなしえなかった仕方で見事

に語っている。彼とともにすでに、歴史学は明らかに自然科学の方に傾いてゐる[Espinas 1877:53-54]。ここに、歴史学における進歩の観念や、因果関係、さらには社会を有機体としてとらえる見方や、自然科学から着想を得る視点が主張されている。

また、自然の歴史と人間の歴史との相同性も主張されることとなる。エスピナスは、キネの次のような言葉を引用する。「自然の歴史が人間の歴史を明らかにするならば、逆に人間の歴史が自然の歴史を明らかにすることも可能であると考えるに至った。なぜならば、結局のところ、両者は同一の全体の部分をなすからである。同一の法則が、両者の展開をつかさどらなければならない」。キネは、法則や類型の観念が自然科学から歴史科学へと伝えられたとすれば、進歩の観念は歴史科学から自然科学へと伝えられたと主張する。一方の歴史学者と他方の博物学者とは、相互に知ることにも理解し合うこともなく、おのおのがそれぞれの仕事をしてきたが、その仕事は同一なのである。博物学者と歴史学者とは、本能的に互いの知性を借用している。一方の方法が、他方の方法となるのである[Espinas 1877:56]。このように、人間を対象とする学問の、自然科学との関係の深さが、キネを引き合いに出しながら主張されるのである。

社会を一つの独自の存在とする見方は、ケトレにも見出すことができる。自然の社会体が生命を有するものであるということ、ケトレは認識していた。ケトレによれば、「人民は、彼らの間に何らの関係も持たない人間の集まりとしてとらえられてはならない。人民は、もつとも優れてもつとも調和のとれた特性を享受する、ある全体を、もつとも完全な集団を形成する」のである。国家の一生は、個人の一生と同様である。青年期があり、壮年期があり、かなり一般的に次の改革の指標である芸術や科学や文芸の完全な開花と同時期に、勢力と富の発展に到達するとされる[Espinas 1877:58-59]。こうした見方は、社会の展開を、生物の一生の展開とのアナロジーによってとらえる観点を導くこととなり、有機体的な社会観と結びついていく途が開かれることとなる。

一方、政治経済学については、その根本的な原則の一つは、外的な政治的権威の介入を要求することなしにもつとも好ましい仕方で経済社会が組織される、ということであったという点がまず指摘される。この原則は、それ自体が、感情のある種の共通性ならびに、あらゆる熟慮に先立つ観念に由来する、自然法則の認知を含蓄している。経済学者たちが、社会体、社会有機体、社会生理学といった表現を用いるように導かれたのは、これによつてなのである。したがって、自然科学が経済科学において重要な借用の素材に出会つたとしても驚くにはあたらない。分業の法則が、生物学のなかに実り多い適用を見出したことはよく知られている。観念のこうした交換は、その研究の対象である社会を生命体としてとらえる政治経済学の傾向を確かに示している。しかしこの傾向は、その全体のなかに非常に広範な対象を包含する科学、すなわち社会学が出現する以前には、社会体の本性についての明示された理論には到達しえなかつたのである [Espinass 1877: 63-64]。ここには、社会に関する理論として、先駆的なものとして経済学があり、それを承けながら社会学が発展してきた、という主張が認められる。

さらに、生物学や動物学の貢献も強調される。社会学へと至る決定的な進歩の前に、生命それ自体ならびに生命体がより良く理解されなければならなかつた。生命の条件一般を研究する生物学、現実の生命体を研究する動物学は、高級社会集団の経験的な研究に最終的に取りかかる前に越えなければならぬ段階であつた。生物学は、三つの重要な命題を確立し、個人に限定されたものではあるが、要約された社会科学をそれらのみで形成する。それらの命題とは、第一に、個人が社会である、すなわち、生あるものはすべて、それ自体が生あるものから構成されたものである、第二に、構成されたものの個性性は、構成する要素の個性性を排除するのではなく、反対にそれを前提とし、またそれとともに成長する、第三に、有機的な構成は、積み重ねられた無数の段階（あるいはむしろ同心円的な領域といった方がより適切である）を含んでいる、というものである [Espinass 1877: 64-72]。これらの命題は、生物を多様な数多くの構成要素から成る存在ととらえるものであり、こうした見方が社会に応

用される時、社会有機体的な観点につながる視点を提示することとなる。なお、ここで考えられている構成要素とは、基本的に生物の各器官という解剖学的なレベルを中心としてとらえられたものであることは、ここでの議論の水準として確認されておいてよい。

そして、ヘッケルやクロード・ベルナルなどの名前を挙げ、彼らからの引用も示しながら、生物学の多様な学派の人々によって、生物学と固有の意味での社会科学との親縁性が感じ取られていた、と述べられる [Espinass 1877: 731]。

また、動物界における個体間の結合を研究することによって、動物学はさらにより直接的に、社会科学の到来を準備したとされる。この役割を果たした動物学者として、キュヴィエ、カトルファージュなどの名前も挙げられている。動物学は、低級動物によって形成される結合や、集団で生活する昆虫の社会組織や、高級動物における関係性をもった生活を示す諸現象を研究してきた。生物学においては、個体を形成する解剖学的な要素の結合と、個体から構成される動物社会との間にはわずかな類比しかないが、動物学は、両者の間に比較以上のものを打ち立てようと試み、これら結びつける数多くの移行の存在によって、これらを唯一の体系のなかに包含しようとするのである。この文脈では、クレマン・ス・ロワイエによる『人類ならびに有機体系における仲間について』 *De la nation dans l'humanité et dans la série organique* の名も引用されている [Espinass 1877: 73-74]。

さて、第一の言語学、歴史学および古生物学、第二の統計学および政治経済学、そして第三の生物学および動物学というこれら三つの科学のグループが社会を有機体的な一つのまとまりとしてとらえ、新たな社会科学への道を準備してきたわけであるが、これら多様な科学の動きを連携させ、それらに決定的な方向を与えた人物として、『動物社会』の博士論文審査に際して先に述べたような問題を惹起した、オーギュスト・コントの名が挙げられる。社会科学の目的と方法を体系的な仕方と定めようとした最初の人物がコントであり、こうした試みは彼

の名前を引き合いに出すような形で行なわれてきたとされるのである。「したがって、この名前に言及し、この学説を提示する必要性を免れるわけにはいかない」という言葉をもって、エスピナスはコントの重要性を主張し、その議論の展開を進めることとなる [Espinas 1877: 74]。

コントは、サンシモンによって一八世紀につながるが、同時にコントはしばしばコンドルセを自らの主要な先駆者として引き合いに出す。当初、コントの野心は「道徳科学を物理学と同列にまで高める」ということに限定されていたが、間もなく彼の観点は拡大し、人間の科学が、他のすべての科学の目的であり完成でなければならぬ、ということを理解したのである。ここで、コントによる諸科学の発展段階の説、すなわち、具体的な運動から引き出された数と大きさに関する抽象的な観念を研究する数学、天体の具体的な運動を計測する天文学、物体の外的な変化の法則を決定する物理学、分子の内的な変化を洞察する化学、生命現象の恒常的なものを観察する生物学、社会体が維持され発展する一般的な条件を研究する社会学、という周知の議論が注目される。これらの間には、運動から社会的事実へと至る秩序が存在し、次第に複雑に、次第に個別的に、そして次第に高貴な術語をもった一つの連続性をたどることとなる。おのおのは、その直前のものを前提としており、もつとも高い段階で、もつとも個別的で、もつとも複雑な科学は、すべてのものの最後にしか、この長い階梯のすべての下位の段階が乗り越えられたのちにしか、なされえないのである [Espinas 1877: 75-76]。

そうであるならば、社会的事実に関する科学が最終的に構成されるのが一八世紀半ばまで待たなければならなかったのも、驚くにはあたらない。すなわち、生物学が前もってその展開を完成させ、そこで練り上げられたその方法と、社会学の基盤となるべき本質的な真実とを社会学に伝達することができなければならなかったのである。つまり、社会は、組織の一般法則より以前には知られなかった。また一方、科学が社会的実在をその全体において理解し、独自の研究の対象として定めるためには、人間社会がその一体性を意識することが必要であつ

た[Espinas 1877:77]。このように、コントの議論にも拠りながら、とりわけ生物学から社会学への展開、生物学を基盤とする社会学の構築ということが主張されることとなる。

独自の目的を有することにより、社会科学は独自の名称に値するものとなる。コントはこれに、社会学の名を与えることを提案するのである。新しい名前というのは、それ自体としては何にもならないが、しかしこの語が新しい現実を定義するのであれば、これを軽視してはならない。この新しい語によってコントは、より限定的な観点から同じ対象を扱う歴史学、政治経済学、統計学、社会物理学および社会算術学といった諸科学から、社会学を区別する。彼は、かつては全般的な語であったが、現代では社会現象に関する科学よりもむしろ統治の技術を意味するようになった、政治学から社会学を区別する。政治学が人間にしか適用されないのに対して、社会学は、社会的事実が立ち現われるところどこでも社会的事実に適用されるのである[Espinas 1877:79]。ここでも、人間の社会に必ずしも限定されずに、「社会的事実」の存在するところであり一般的に研究が進められるものとしての社会学が考えられている。

こうして、生物学が社会学を準備し、生理学的な生が、ある種の意思的な方向性をもって、道徳的な生の基礎を据えることになる。同様に、動物の種についての一層具体的な科学あるいは動物学が、人間よりも下級な存在における社会生活の萌芽を示すのである[Espinas 1877:86]。

そして、エスピナスによれば、全体的にとらえられたコントの哲学において、独創的でまた深遠であるのは、思考と愛情、精神と心情、科学と道徳性といった、他の体系においては通常切り離されている二つの要素を組み合わせるために行なった試みにある[Espinas 1877:89]。特に、科学と道徳性とを結びつけて考えようという点は、「道徳生活の諸事実を、実証諸科学の方法によってとりあつかおうとする、ひとつの試み」[Durkheim 1893:XXXVII;邦訳、三二頁]として自らの問題を設定し、議論を展開する、とりわけ初期のデュルケームに明示的な

問題構成と共通する点として興味深い [cf. 白鳥 二〇〇二]。

さて、このようにコントに拠りながら議論を展開したのち、エスピナスはスペンサーにも注目する。スペンサーもまた、諸科学の關係に着目し、たとえば、神経を機械論的な観点からとらえることとなった。もしすべての現象が機械論に還元されるならば、思考の現象もまたそうなのである。これは、思考の現象が主観として、すなわち意識の状態として、それ自身が、この還元に適しようというわけではない。そうではなくて、それがなければいかなる思考も生み出されない、神経体系の変化、すなわち客観的な現象としての普遍的な法則の下に、思考の現象がしたがわなければならないということである。この描写こそ、スペンサーが『心理学原理』のなかで試みたことであった。そこでは、神経体系が一つの結果であり、機械論の特殊な事例であることが明らかにされた。この著作のなかで、初めて、有機体のなかにおける神経の生成と働きを機械論的に説明することが試みられたのである [Espinas 1877: 92-93]。

そして、こうした観点からのつながりとして、社会現象をとらえる視点も提示される。社会の構成要素である人間が考える機械であるならば、要素のあらゆる集塊も要素自体と同じ法則にしたがうことからして、社会も同様であるにとらえられる。すなわち、社会現象も機械論的な現象であり、ただ個人の有機体的、精神的な現象よりも無限に一層複雑であるに過ぎない、というわけである。この観点からすれば、社会学は、他の諸科学と同様、物理学である。計算に助けられた観察がその出発点をなすのであり、また、その法則の、運動の一般法則への還元がその到達点をなすのである。さらに、社会現象と運動現象との間の関連づけは、比較や類推ではなく、「文字通りに解釈されるべき」であるとされる。欲望、情念、感情といった、集合的な精神現象は、個人の現象と同様に、それが科学的に理解されうる唯一の観点である客観的な観点からすれば少なくとも、まったく実際に機械論的現象なのである [Espinas 1877: 95]。

結合あるいは集団は、有機的あるいは非有機的なすべての存在の一般法則である。固有の意味での社会は、この普遍的法則のもっとも複雑でもっとも高められた、特殊な事例に過ぎない。社会的あるいは他の存在は、絶対的で不可分なものではなく、本質的に相対的で多極なものである [Espinass 1877: 100]。

さらにエスピナスは、コントとの比較を通じながら、スペンサーの議論の特徴を浮き上がらせようとする。

第一に、科学の分類、したがって体系内における社会学の位置に関して、スペンサーとコントの立場は同一ではない。スペンサーは、フランス哲学において重要な、線状の一連のつながりをその展開の中に見ることは同意しない。人間の知識は有機体的なものであり、その進化は他のあらゆる有機体と同様、すべてが包含されている萌芽から、それぞれの部分が区別され、次第に相互依存的となる、より良く定義された全体へとなされる。したがって、社会学は常に存在してきたのであり、ただ未発達なものとして存在してきたに過ぎない。そして社会学は実証主義の創始者の頭脳のみならず諸部分から生まれたのではないことになる。

第二に、コントは、それなしでは社会学が不可能となる科学、すなわち実験心理学を無視した。確かに、コントの著作の中には、数多くの心理学的な観点が見出される。しかし結局のところ、彼は心理学の独自の存在を否定した。これは彼の体系における重大な欠落である。もし集塊の性質が、生物学と同様に社会学においても要素の性質によって決定されるならば、もし社会が意識や感情や観念の組み合わせの上に基礎を置いているならば、個人としての人間についての研究は、もっとも高い重要性を有することになる。これが、社会学の研究に対しての、最後の、直接的な準備となるのである。

第三に、コントにおけるこの誤謬は、総合的な方法のみが社会学にふさわしく、また社会学の出発点は人類全体についての考察である、とする確信に起因している。すべての科学に共通する、仮説の使用を除いて、社会学は実験的な分析によって研究されなければならない。この観点において、個人としての人間は実在の存在であり、

個人の現実の集団、すなわち人類は、その統合が十分に完全でない限り、存在しないこととなる。

第四に、歩みを進める人類が、実証主義的な体系を知り、新しい宗教を實踐するやいなや止まるといふこの概念は、進化の法則に根本的に反する。いかなる均衡も絶対的なものではなく、したがって決定的なものではない。ある配置が確立されるまさにその間においても、新たな再配置が準備される。したがって人類の運命は、それが実現されるに至る長い期間にもかかわらず限定的なものである。地球が回転を止め、太陽が放射を止めるのと同じように、人類も思考を止めるのである。永遠性というものは宇宙にしか属さない。反対に、人類の未来が進化の学説にしたがって短くなるならば、その過去はずっと昔へとさかのぼる。なぜならばその過去は、フランスの実証主義が考える以上に一層深い根源を有するからである。コントによって先見的に否定されたダーウィン主義を、スペンサーは自らの体系の派生として明白に受け容れる。したがってスペンサーが『心理学原理』の末尾において動物の社会を研究するとき、彼はそこに人間社会の前兆的、象徴的な予告を見ているのではない。彼はこの社会の実効的、歴史的な準備を行なっているのであり、彼がその誕生を描き出す社会的本能は、遺伝によって、はるかな血統の継承者である人間有機体にまで伝えられ、増大しなければならぬ。

第五に、コントが政治的に保守的であったとすれば、スペンサーは同じ傾向を退嬰主義が現われるところにも押し進める。巨大な社会有機体において、個人の自発的な行為は、スペンサーによれば、ほとんど何の役割も果たさない。全体の進化は無意識の習慣によって定められ、これは各個人が必然的にしたがう遺伝的な有機的形態に基礎を置いているのである。したがって、急激な改革には彼は賛同しない。スペンサーの意見にしたがえば、政府自体が、悪くも、そしてとりわけ良くも、社会の運命に対して影響を与える度合いは、普通に考えられたいるよりもずっと小さい。いかなる真の社会も、統治する部分と統治される部分との間の境界画定が確立されなければ形成されないというのは確かである。しかし、神経体系が有機体の体液の内部で行なっているのと同様に、

調整機構はその生命自体ならびにその運動を、その行動にしたがう機構の内部から汲み取っているものであり、調整機構がこれにしたがう機構に対して反応するとすれば、それは前者が後者から得る力によってなのである [E. pinas 1877: 101-103]。

このように、コントやスペンサーの議論なども引き合いに出しながら、エスピナスは社会学についての基礎づけを行なおうとする。ここでは、コントばかりでなく、スペンサーの議論への着目がなされていることも重要である。ここで、ダーウィン自体への言及はなくとも、スペンサーを通じて「ダーウィン主義」への言及はなされるのであり、当時の進化論からの一定の影響を認めることができるからである。また、生物学との関係で社会学をとらえようとする視点や、有機体的な社会観に注目するところなどにも、エスピナスにおける進化的な発想の影響を認めることができる。

ただし、社会は単純に有機体と同様のものとしてとらえられるだけでは十分ではない。社会組織を生物組織と比較し、そうして諸社会を一種の有機体とすること、こうした比較を通じて社会生活には自然発生的なものが存在すること、また社会生活がすべての種類の生物と同様に外的で機械的な衝動によってではなく内的な諸原因によって結果すること、こうしたスペンサーの思想をフランスに導入したのはエスピナスであり、さらに、『動物社会』は実際、何よりも先ず諸社会は動物と同様、生まれ、存続し、死滅し、組織されること、社会学は生物学の一分野であるという印象を残していると認めた上で、デュルケームは次のように述べる。「諸社会が有機体であるとしても、それらは本質的に意識から成るという点で、純粹に物理的な有機体とは区別されるのである。それらは諸表象の体系でないとするれば何物でもない。それゆえ、それらが生きた存在であると述べたとしても、十分に特徴づけられないのであって、「それらは生きた意識であり、諸観念の有機体である」と付け加えられなければならないのである」 [Durkheim 1900: 123-124; 邦訳、九八―九九頁]。そしてデュルケームによれば、このよ

うな考え方を先駆的に示したのがエスピナスなのであった。「社会学と心理学はこうして同一の祖先である生物学から生まれた二つの分枝として現われるのであり、それらはある点から分枝するのであるが、それぞれの発展の中に一種の並行状態を保持している。これらは双方共に集合し、組織された諸表象、諸情緒、諸衝動である。これによって社会学の対象はスペンサーがよしとしていた諸々の生物学的類比によるよりも一層よく確定されたのである。というのは諸社会はそれらが組織化された存在であるということによってしか生物と比較されないからである。ところで組織とは社会生活の外的な枠組にすぎない。それゆえ、その内容を構成するものについての表象を我々に与えることが重要なのである。エスピナス氏が社会を諸観念の組織と指摘するとき我々に提供するはこの表象である」[Durkheim 1900:124-125; 邦訳、九九頁]。「集合表象」はデュルケームの社会学における重要な概念となるが、こうした概念につながる考え方がエスピナスにおいてすでに提示されていた、とデュルケームは評価するのであった。この点においても、エスピナスはデュルケームによる社会学の内容面での先駆者ととらえることができようが、しかしながらデュルケームは自らの研究とエスピナスの立場との間に差異を見出し、一線を画してもいる。すなわちデュルケームは、「社会学の観念はこうして次第に堅固にされ、決定されていった。しかしながら社会的現実についてのこれらあらゆる観念がなお、いかに一般的かつ概略的なままであったかを感じないわけにはいかない。諸有機体と諸社会との、また個人意識と集合意識との可能な限りのあらゆる比較も、それだけでは我々に何らの法則も与えないであろう。それらは諸科学がその伝説時代には有効に採用したが、爾後そこから脱すべき予備的な諸手続きである」[Durkheim 1900:125; 邦訳、一〇〇頁]と述べ、エスピナスの立場は社会学の確立にとっていまだ過渡的で不十分なものであると主張するのである。

五 動物社会への視点

さて、エスピナスのこの著書は、『動物社会』と名づけられているわけだが、これまで検討してきた、彼の考える社会学と動物社会との関係とはいかなるものであるのだろうか。

動物社会と人間社会とを対比させながら考察しようとする立場に対して、従来向けられてきた非難として、こうした立場は人間を動物のレベルに引き下げるものである、ということが挙げられる。人間社会の組織と動物、たとえば蜜蜂や蟻の社会の組織とのこうした比較においては、人間の人格の独立性や尊厳が不可避免的に損なわれるというわけである。実際、動物社会の法則をそのまま人間社会に移しかえることを主張し、またおのこの比較研究の結果が二つの対象に関して同一のものでなければならぬとするならば、なるほどそうであるかもしれない。しかしエスピナスはこうした推測に対しては反対であると主張する。動物社会学がなされたときには、人間社会の本質的な法則、法と絶対的価値の尊重という、個人に授けられたもので、あたかもそれが真の危機に立ち向かっているかのように護ることに人々が専心しているものは、反対に、博物学者による観察によって十分に堅固なものとされる。それは、動物社会もまた、こうした法則自体によってしか存在しないからである。実際、社会的な高等動物の多くは、あたかも集団の成員の人格が他の者に対して絶対的な価値を有しているかのように、他の者に対して振舞うのである。そして、社会組織が物理組織と同一の法則にしたがうのだから、有機体は、それを構成する要素の生命力が維持され、増大する限りにおいてしか、生存し、繁栄することはできないのである。生存のための闘争、個人への圧迫が、同一の集団、同一の社会の範囲内での生活の特徴的な特性であるところ

はなく、この闘争をより良く支えるための同盟、連帯的に結びついた個人の尊重が、その第一の条件であり、支配的な特徴なのである [Espinas 1877: 120-121]。第二帝政崩壊の直後に知的なキャリアを開始し、祖国を再生させることがその思考の目的であった思想家の一群にエスピナスは属し、彼の第一のそして常に変わらない目的は政治的、道徳的实践に原則を提供することであった⁽⁴⁾とダヴィは述べるが [Davy 1923: 214]、ここに示されている、生存闘争的な社会観に對置される調和的な社会観は、エスピナスの基本的な立場を示していると思われることができる。

動物の社会においても、弱者が保護され、年少者が注意を払って育てられ、年長者がときに援助され、同一の部族、同一の家族の成員が、見返りの期待をいささかも抱くことなく互いに献身し合うことが見出される。動物社会に注目すること、それは同時に、非常に遠くからそれらを上回り、非常に高くからそれらを支配する人間社会に注目することなのである。人間性とは、先行する発展の最後の終着点であることを示すことによって、文明の要因を明らかにすることができるのである [Espinas 1877: 122]。

では、社会とはいかに定義されるのであろうか。エスピナスによれば、社会の概念とは、分かれている生命体の永続的な援助としてとらえられる [Espinas 1877: 123]。もっとも、調和的な社会観が前面に押し出されている。エスピナスは、社会の類型として、正常な社会と、偶然的な社会という、二つの類型を提示する。前者の正常な社会とは、同一の種に属する要素から構成され、互いの助けなしには存在しがたい社会であり、後者の偶然的な社会とは、異なる種に属する要素から構成され、必然性というよりもむしろ利便性によって結びついている社会である [Espinas 1877: 124, 163]。社会を生み出すものは空間的な共同性ではなく、機能の面での共同性であることも、社会に對する観点として重要である [cf. Davy 1923: 223]。

さて、こうした観点からは、家畜も一つの相互性であり、社会である、ということも主張される。家畜は従属

ということを前提としており、従属と組織化とは同一のことであるとエスピナスは述べるが[Espinas 1877: 137]。従属を違和感なく強調するエスピナスのこの考え方は、現実の政治や社会の場面に当てはめて考えるならば、指導層と一般大衆とを分け、前者が社会をリードすると考える、エリート主義的な観念に連なるものとしてとらえることができる。

闘争的ではなく、調和的なエスピナスの社会観からは、ダーウインの選択理論も批判されることとなる。蟻とありまきとの関係を例に出しながら、エスピナスはこの批判を行なう。ダーウインによれば、ありまきを多く集めることのできる蟻が、有利に立つ。しかし、エスピナスはこうした見方に対して反論を提示する。第一に、ありまきを集められなくとも蟻は生きていくことが可能である。第二に、ありまきを巣に運び入れることは利点と同時に不都合ももたらしえたと考えることができる。そして第三に、蟻とありまきの関係それぞれ自体が、選択の理論によっては説明されないとされるのである[Espinas 1877: 152-153]。またここでは、クレマンズ・ロワイエの翻訳による『種の起原』の引用がなされていることにも注目しておきたい。

さらに、社会学と進化との関係について、エスピナスは次のように述べる。社会学は、同一の進化の様々な時点において、動物によって示された社会的事実を、人間によって示された社会的事実と同様に理解してきた。人間社会のなかに社会生活の開花を絶えず見るように、下級社会におけるその原基を研究しなければならぬ[Espinas 1877: 168]。動物社会は、社会学と固有の意味での生物学との頂点の間の関係を取り結んできたのである[Espinas 1877: 172]。基本的に、動物社会についての生物学的な研究が、人間社会についての社会学的な研究に資するという視点が提示されるわけである。こうした観点から、『動物社会』の最後では、「動物の道徳性」について語られることとなる。

エスピナスの『動物社会』は、生物学からの示唆なども受け、ダーウインの議論への言及なども見受けられるが、基本的には哲学的な考察としてとらえられるべきである。ここでは、動物社会を通じて人間社会を語るという議論の仕方が見られるわけであるが、こうした議論の仕方は、今日の社会科学の分野では、あまりなされない。これを単に、議論の水準が未成熟であったからだにとらえることも可能ではあるが、社会科学の、実現はされなかった別の発展の道筋の可能性を示していたととらえることも可能であろう。実際、社会ダーウイニズムというかたちで生物学的な比喻で社会について語るといことも、少なくともある時期には行なわれていたのであるからなおさらである。

生物学的な示唆から議論を展開するにしても、闘争的な社会観ではなく、調和的な社会観にもとづいてエスピナスの議論が進められていることも興味深い点である。エスピナスはシェフレのようなドイツの学問をフランスに紹介する一方、本稿でも見てきたように、スペインサールの紹介を行なうなど、イギリスの学問をフランスに伝える役割も果たしている。イギリスの動向の紹介ということで言えば、エスピナスは当地の大学拡張（ユニヴァーシティー・エクステンション）についての報告も発表しているが[Espinass 1892]⁽⁹⁾、この大学拡張という動きも、少なくともフランスにおいては階級調和的な文脈で議論されていた。

エスピナスは、コントやスペンサーらの議論を踏まえながら、動物社会との関連で人間社会を論じ、生物学との関連で社会学を論じようとするわけであるが、しかしながら、生物学から直接的に社会学へとつながっていくわけではなかった。とりわけフランスにおいて社会学の制度化を進めていったデュルケームにとってはそうなのであって、デュルケームは、「確かに社会学は生物学の中にその根を持っているが、表象が機械的運動と区別されるに従って、社会学が真に社会学となる時生物学から分化する」[Durkheim 1900: 124; 邦訳、九九頁]と述べるのである。

エスピナスの議論は、これ以降の人々に直接受け継がれて展開されたとはあまり言えない面もあり、またエスピナス自身、自分の立場をのちに修正することにもなるが[Espinas 1901]、進化論的な言葉を用いればある意味で「淘汰」されてしまったように思われる。こうした議論のなかに、出発点に立ち返つての、可能性としての進化論と社会との関係や、あるいは社会学の展開のありようを探ることが可能となるのである。

注

- (1) ローグ[Logue 1983]は、当時のフランスの政治状況や思想状況なども踏まえた幅広い文脈のなかで、アドルフ・フランク、エルム・マリイ・カロ、ポール・ジャネ、ジュール・シモン、シャルル・ルスヴィエ、フェルディナン・ビュイツソン、ガブリエル・セアイユ、ジャン・イズレ、ガブリエル・タルド、アルフレッド・ファイエ、エミール・デュルケーム、セレストン・ブーグレ、レオン・デュギーらとともに、エスピナスについても論じている。
- (2) エスピナスの経歴や主要著作などに関しては、主としてラランド[Lalande 1927]、シャルル[Charte 1985]などを参照している。
- (3) デュルケームがボルドー大学にポストを得るに際しての、エスピナスならびにリアールの助力に関しては、たとえばジョーンズ[Jones 1993: 34]でも触れられている。
- (4) 自らも同じ問題関心を共有するデュルケームは、当時の状況について次のように述べている。「覚醒が起こったのは、漸く〔普仏〕戦争直後である。諸事件によって生じた動揺は諸々の精神に生氣を与える刺激剤であった。祖国は世紀の初頭と同じ問題に直面した。そのうえ、帝政をつくり上げていた組織は全面的に崩壊したばかりであり、別の体制、より正確に言えば、行政上の諸方策によるのとは異なった仕方方で存続しうる体制、つまり真に諸事物の本性に基礎を置いた体制を再構築することが重要であった。そのためには諸事物の本性とは何であるのかを知ることが必要であり、したがって、諸社会についての科学の緊急性が直ちに感じられたのである」[Durkheim 1900: 122-123; 邦訳、九八頁]。
- (5) 詳しくは、白鳥[二〇〇三]を参照。

参照文献

- Charle, Christophe 1985. *Les professeurs de la faculté des lettres de Paris, dictionnaire biographique 1809 – 1908, volume 1*. Paris : Institut national de recherche pédagogique et Éditions du CNRS.
- Davy, Georges 1923. L'œuvre d'Espinas. *Revue philosophique de la France et de l'Étranger*, 48e année, tome XCVI, septembre 1923 : 214 – 270.
- Durkheim, Émile 1888. Cours de science sociale. Leçon d'ouverture. Dans *La science sociale et l'action* [1970] : 77 – 110. 「社会科学講義」(佐々木交賢・中嶋明勲訳) 一九八八、六一―八九頁。
- 1893. *De la division du travail social : Étude sur l'organisation des sociétés supérieures*. (11e éd., Paris : P.U.F., 1986). 『社会分業論』(田原音和訳) 青木書店 一九七一。
- 1895. L'État actuel des études sociologiques en France. Dans *Textes 1* [1975] : 73 – 108.
- 1897. Lettre à Céléstin Bouglé. 24 nov. 1897, Bordeaux. Dans *Textes 2* [1975] : 413 – 414.
- 1900. La sociologie en France au XIXe siècle. Dans *La science sociale et l'action* [1970] : 111 – 136. 「一九世紀におけるフランスの社会学」(佐々木交賢・中嶋明勲訳) 一九八八、九〇―一〇九頁。
- 1915. La sociologie. Dans *Textes 1* [1975] : 109 – 118.
- 1970. *La science sociale et l'action*. (2e éd., Paris : P.U.F., 1987). 『社会科学と行動』(佐々木交賢・中嶋明勲訳) 恒星社厚生閣 一九八八。
- 1975. *Textes 1 – 3*. Paris : Éditions de Minuit.
- Espinas, Alfred 1877. *Des sociétés animales*. (3e éd., Paris : Felix Alcan, 1924).
- 1892. L'Extention des universités en Angleterre, en Écosse et aux États-Unis. *Revue internationale de l'enseignement*, tome 23, 201 – 219 et 313 – 342.
- 1901. Être ou ne pas être ou postulat de la sociologie. *Revue philosophique de la France et de l'Étranger*, 26e année, tome II, mai 1901 : 449 – 480.
- Jones, Robert Alun 1993. La science positive de la morale en France : les sources allemandes de la *Division du travail social*. Dans

Philippe Besnard, Massimo Bortolandi et Paul Vogt (sous la direction de), *Division du travail et lien social : La thèse de Durkheim un siècle après*. Paris : P.U.F. : 11 - 41.

Lalande, André 1927. Notice sur la vie et les travaux de M. Alfred Espinas. *Séances et travaux de l'Académie des sciences morales et politiques*, 87e année, 1927 - 1er semestre : 327 - 367. Paris : Félix Alcan.

Logue, William 1983. *From Philosophy to Sociology : The Evolution of French Liberalism, 1870 - 1914*. Northern Illinois University Press. 『フランス自由主義の展開一八七〇〜一九一四——哲学から社会学へ——』（南充彦、堀口良一、山本周次、野田裕久 訳）ネルヴァ書房、一九九八。

Mucchielli, Laurent 1998. *La découverte du social : Naissance de la sociologie en France (1870 - 1914)*. Paris : Éditions La Découverte.

白鳥義彦二〇〇一 「デュルケームと道徳」『福山女子大学研究論集』第三二号、社会科学篇、一五一—一五九頁。

——二〇〇三 「フランス第三共和政期における高等教育と民衆教育」『日仏教育学会年報』第九号（通巻番号三二）、一〇三—一四頁。

田原音和一九八三 『歴史のなかの社会学——デュルケームとデュルケミアン』木鐸社。